

佳作

愛の実る稲穂

東京都サレジアン国際学園高等学校一年 村田 彩智

毎年八月のお盆になると千葉県九十九里にある祖母の実家に家族で行き、親戚で集まりご先祖様に感謝して過ごす時間が、幼い頃から楽しみでした。祖母の実家は、代々続く農家で現在は祖母の兄が農家を営んでいます。私達は、祖母の兄を「田舎のおっちゃん」と呼んでいます。おっちゃんは、いつも私達に美味しいお米や葱を送ってくれますので、私の家ではスーパーでお米を買ったことがありません。私も私の母も田舎のおっちゃんの作ってくれたお米を食べて育ってきました。私が、小学五年生の時に社会の宿題で農業についての自由研究をしました。私は、田舎のおっちゃんのお手伝いをしながら農業の大変さや苦勞、農作業で工夫している事や困っている事などを知り、毎日食べているお米一粒一粒に農家の方々の深い思いがあるのを強く感じ、貴重な体験をすることができました。

私達は、今年もお盆に田舎のおっちゃん家を訪れました。いつも明るく元気で面白い田舎のおっちゃんも、四

年前に脳梗塞とパーキンソン病を患い身体も思うように動かすこともできなくなってきました。去年よりも身体が不自由になり話をすることや足腰も痛く辛そうでした。けれども、いつもと変わらず

「暑いのに東京からよく来たね。」

と笑顔で迎えてくれます。おっちゃんは、身体が不自由な状態でも毎日畑仕事に行き農作業をしていると聞いて驚きました。私は、病気を患いながら農作業をするのはとても大変なことだし身体も辛いのではないかと心配になりました。そんな私に田舎のおっちゃんは、

「畑や田んぼも生き物だから、お米や葱も生きているから、毎日、様子を見て管理して我が子と同じように愛情込めて大切に育てないと病気になったりして育たなくなってしまうからね。そしたら本当に悲しいよ。お米を必要としてくれる人や、食べてくれる人の笑顔を思ったら休んでなんていられないよ。」

と話をしてくれました。私は、田舎のおっちゃんが、自分の身体のことよりも農作業を優先し、自分の仕事に誇りを持ち、自分の身体が少しでも動くうちは農作業を続け、畑や田んぼ、農作物を守っていかうとする強い気持ちと信念に心を打たれ涙が出ました。

お米が私達の口に入るまでには、一年を通して土づくりや水の管理、天候によっても左右されるとても難しい作業があるのです。暑い日も雨の日も、風が強い日も毎

日田畑に行き稲や葱の様子を見て育てているのです。地球温暖化により、農作物の生産量・品質に被害が発生したり対策を考えていかなければならない問題点も多くあります。三十〜四十坪の稲穂で埋め尽くされた金色の田んぼからは大人ひとりが年間で消費するお米が採れるといわれるなど、人が生きるために欠かせない実りがそこにはあります。そして、田畑にはたくさん生物が棲む豊かな生態系があり、重要な役割を担っています。

私は、大学で生物学を学び研究し、人と生物が共存できる社会を作り、地球の生態系を守っていくことが私の夢です。私達は、生活のあらゆる面に生態系からの恵みを受けていると同時に、はるか昔から、その土地その土地の生態系をうまく活用しながら暮らしてきました。人間の毎日の食と命を支える農業と生物多様性は地球を守る命の繋がりでもあるのです。私も、田舎のおっちゃんのように誇りと信念を持ち最後まで諦めず、新しい発見や研究と向き合い社会に貢献できる仕事をしたと思います。田舎のおっちゃんが、田畑を大切に守り人々に食の恵みを与えてきたように、豊かな地球の生態系や生物、どんな小さな命をも守っていけるような生物学者になりたいです。自然も人も大切にできる社会をつくっていききたいと思います。

私達に手を振り見送る田舎のおっちゃんの姿は、私にどんな困難にあっても諦めない力と希望を与えてくれま

した。帰り際に三十キログラムのお米を持たせてくれました。田舎のおっちゃんが病気を抱えながらも育ててくれた心のこもったお米は、いつもよりも重く感じました。私は、今まで以上にお米一粒一粒に感謝して大切にいただこうと思いました。

来年の夏も田舎のおっちゃんと自然豊かな実りある田畑に会えることを願い、心地よい潮風を感じながら九十九里をあとにしました。